26. クロストリジウム性ガス壊疽における高圧酸素療法の効果と実施方法について

森本文雄　岩井敦志　吉岡敏治　杉本　侃
（大阪大学医学部救急医学）

【目的】クロストリジウム性ガス壊疽における高圧酸素療法の効果と実施方法について検討を行った。

【対象】培養でクロストリジウムが検出されたガス壊疽症例19例のうち，クロストリジウムが連続して検出された9例を対象とした。

【方法】来院時のレントゲン写真のガス像よりガス壊疽の重症度を分類し，クロストリジウムが検出された最終病日と高圧酸素療法の実施期間および回数について検討を行った。

【結果】対象例の重症度は，筋層内までガス像を認める重症例が6例，ガスは皮下に限局するが大量に認める中等症例が1例，ガスが皮下に散在するのみの軽症例が2例であった。高圧酸素療法の平均施行回数は12.9回（2—19回）で，実施期間は平均11.4日間（2—28日間）であった。クロストリジウムは平均第14.6病日（第4—27病日）まで検出されていた。クロストリジウム検出期間中は，発熱，白血球数増多など感染徴候が認められた。重症例のうち高圧酸素療法を1日に2回，連日行った2例では，クロストリジウムの検出は第5病日および第6病日までで，早期に消失した。他の例では，1日に2回の高圧酸素療法を連日行ってはおらず，培養陽性期間は平均第16.0病日（第4—27病日）と長期にわたっていた。これは軽症2例でも同様で，高圧酸素療法はそれぞれ1日1回を2日間，および延べ5回を7日間実施したのみで，第10病日および第21病日までクロストリジウムが検出されていた。

【結語】高圧酸素療法は1日に2回，連日行うことにより，その効果を認めるが，クロストリジウムが消失するまでには長期間を要すると思われた。

27. エンドキサン投与による出血性膀胱炎に対する高圧酸素およびプロスタグランディンE1併用療法

矢沢　広　久保田洋子　笹川五十次
中田瑛浩
（山形大学医学部泌尿器科）

エンドキサン膀胱炎はエンドキサン投与後の重篤な副作用の1つである。本剤投与により膀胱から重篤な出血が誘発され，生命の危険を伴うこともある。我々はエンドキサン膀胱炎の1例に高圧酸素療法を施行したのでその治療経験を述べる。

症例は41歳の女性。卵巣腫瘍摘出後，エンドキサンの200mg／日の経口投与を6カ月間継続していた。漸次，排尿痛，頻尿などの自覚症状をきたした。膀胱鏡所見では粘膜の浮腫，出血，毛細血管の拡張がみられた。血液検査，胸部X線，心電図などでは，軽度の貧血以外には特徴的な所見はなかった。ただちに高圧酸素療法を行い，100％酸素濃度下絶対圧2気圧で1日60分，合計30回施行した。

治療効果は高圧酸素療法施行10回目ごろより現われ，排尿痛，頻尿などの自覚症状は消失した。その後，プロスタグランディンE1 10μg／dayの連日静注を追加した。高圧酸素療法終了後の膀胱鏡所見では，粘膜の発赤，腫張などの炎症反応は消失していた。本治療経過中，および治療後に重篤な副作用はみられなかった。

したがって，高圧酸素療法を中心とするプロスタグランディンE1療法がエンドキサン膀胱炎に有用であると評価した。